

土への愛着

野村胡堂

—

「親分、良い陽気じゃありませんか。少し出かけて見ちゃどうです」

ガラッ八の八五郎が木戸の外から風の悪い古金買いのような恰好で、こう覗いているのでした。

「何んだ八か。そんなところから顎あごなんか突き出さずに、表から廻って入って来い」

銭形平次は、来客と対談中の身体を捻ひねって、大きく手招ぎしました。

「顎——ですかね、ヘッ、ヘッ」

ガラッ八は首を引込めて、不平らしく長んが顎をブルンと撫で廻します。

「木戸の上へ載のったのは、まさか鼻の頭じゃあるめえ。体裁振らずに、さっさと大玄関から入って来るが宜い」

「大玄関と来たぜ、ヘッ、ヘッ、親分も宜い気ものだ。敷台しきだいに隣の赤犬が寝そべっているんだが蹴飛ばしても喰い付きやしませんか」

「ていねいに挨拶をして通るんだよ。犬だって見境みさかいがあらア、平常乱暴ふだんなことをするから、お前の顔を見ると唸うなるじゃないか。

——あの通りだよ、三つ股またの兄哥あにき。目白までつれて行ったところで、大した役には立つまい」

平次は客を見て苦笑するのです。

客というのは、目白台で睨みを利かしている顔の古い御用聞で、三つ股の源吉という中年者ですが手に余るほどの大事件を背負い込んで、町方役人からさんざんに油を絞られ、フト二三年前、鬼子母神様境内の茶店の娘、お菊殺しの難事件を解決した銭形平次の鮮やかな腕前を思い出して、我慢の角を折って助勢を頼みにやって来たのでした。(『玉の輿の呪い』第四巻参照)

「親分、何んか用事ですかえ」

八五郎はそれでも犬にも噛み付かれず、障子の外から膝行り込みました。

「三つ股の兄哥だ。挨拶をしな」

「へエ、今日は」

「おや、八五郎兄哥、いつも元気で結構だね。——用事というのは、あつしが持込んで来たんだが、きのう雑司ガ谷に厄介な殺しがあったのさ。わけもなく下手人を挙げられると思ったところが大違い、臭い奴が三人も五人もいて、どれを縛ったものか、まるつきり見当が付かねえ。十手捕縄を預ってこんなことを言うのは業腹だが、今度ばかりは手を焼いたようなわけさ」

「殺されたのは、新造ですかえ、年増ですかえ」

八五郎は膝小僧に双掌を挟んでにじり寄ります。

「馬鹿だなア、三つ股の兄哥が男とも女とも言ってないじゃないか」

と平次。

「なるほど」

「牝が一匹に、男が一人さ」

源吉は引取りました。

「へエ——」

「殺されたのは、雑司ガ谷きつての大地主で、寅旦那という四十男、吝けちで因業いんごうで、無慈悲で乱暴だが金がうんとあるから、殺されたとなると世間の騒ぎは大きい。銭形の兄哥の手を借りたと思って来たが、今すぐと言ってはどうしても手が離せないというから、せめて八兄哥でも——」

「せめて八兄哥ですか」

八五郎は少し尖とんがりました。

「そんなわけじゃない。ぜひ八五郎兄哥に来て貰って——」

「せめて八兄哥——で沢山だよ。折角だから、行って見るが宜い。

とんだ良い修業じゃないか」

平次にそう言われる迄もなく、退屈しきっている八五郎は、どこへでも飛出たくて仕様のない様子でした。

「行きますよ、親分。——あっしが行ったからには、御手拍子びょうし三つ打つうちに、首尾よく下手人を挙げてお目にかけますよ」

「馬鹿野郎」

「へッ」

「こんな調子だから、頼たよりないことこの上もなしだが、猫の子よりは役に立つだろう。今日中に形が付かなかったら、明日は俺が行って見るよ」

「そうしてくれると有難い。それじゃ八兄哥を借りて行くぜ」

三つ股の源吉は八五郎をつれて、ともかくも目白台めじろに帰って行きました。それは桜には少し遅いがまだ鰹かつおにも時鳥ほととぎすにも早い晩春のある日のことでした。

道々源吉は、八五郎のために事件の輪郭を説明してくれました。殺された寅旦那は、寅五郎が本名で、目白台の半分を持っているという大地主、語り伝えの山莊太夫のような男で、ずいぶん諸方の怨を集めておりますが、鬼とでも取っ組みそうな恐しい強気で押し通し、幾度となく刃の下を潜った強か者です。

それが、今朝、無惨な死骸になって、自分の部屋の中に発見されたのでした。強気に任せて、戸締りもろくにしなかったのと、この辺は江戸の町の中と違って、あまり物騒なことでもなかったので、すっかり油断しているところを襲われたのでしよう。

おとといは三月の晦日みそかで、夜中近くまで弟の金次郎を相手に帳面を調べ、それから姪めいのお豊の酌しやくで珍しく一杯呑んで寝たのは子刻このつ（十二時）過ぎ。昨日の朝、お豊が朝の仕度をして、雨戸を開けに行くと、寅五郎は自分の部屋の中で、紅あけに染んで死んでいたというのです。

多分ほろ酔機嫌でよく寝込んだところを、脇差で一と思いに刺されたのでしよう。傷は喉のどに一カ所だけ、主人の部屋が遠かったので、誰も気が付かなかった様子です。寅五郎の枕刀まくらがたなはありますが、これには手を付けず曲者くせものの使った兇器は家の中にも外にも見当りません。

「ざっと斯こんなわけだ。命がけて寅五郎を怨んでいる者はうんとある。まず女房のお富は四十を越しているくせに、犬と猿で、朝から晩まで亭主といがみ合っている始末だ。寅五郎が吝けちなのと、お富が我儘なせいだろう。五年も前から寝部屋まで別にして、お

富は姪のお豊といっしよに裏二階に寝ている」

源吉は語り進みます。

「その二人には下手人の疑いがかからないわけだね」

と八五郎。

「何んとも言えるものか、姪のお豊だって、給料のない下女見たいに、何年越し滅茶滅茶にコキ使われているから、二人相談して口を合せさえすれば、どんな事でも出来るよ」

「でも、傷は一つで喉笛だというと、馬乗りになる外はない、女がまさか——」

と八五郎。

「そんな事もあるだろうな。さすがに銭形の兄哥の仕込みで、八兄哥も良いところへ気が付くようになったね」

「それに、家の者じゃ刃物を隠しようはあるめえ。下水や床下へ^{ゆかした}投げ込んだところで、すぐ知れるに決っている——」

八五郎は少し調子に乗りました。

「そいつは早合点過ぎるぜ。下手人が家の者だからこそ念入りに刃物を隠すんだ。外から入った殺しなら、そんなものはわざと投り出して行くよ」

「なるほどね」

八五郎は簡単に合槌^{あいづち}を打ちます。甚^{はなは}だたよりない推理です。

「それから、主人の義理の弟で金次郎というのがいる。三十七八の喰えそうもない男だが、不思議に文句も言わずに、長年のあいだ番頭代りに働いている」

「給料を貰っているだろう」

「そんなものを出す寅旦那じゃない、食わせるのが惜しくてたま

らないと言った顔だ。四十近くなるまで、女房も持たずに、ガミガミ言われながら働くのは、いかな金次郎でも容易の辛抱じゃあるまいよ」

「それから」

「百姓の松蔵というのが、常雇じょうやといの作男で、納屋に寝泊りして働いているが、何んでも少しばかりの借金の抵当かたに祖先伝来の田地を寅旦那に捲上げまきあられ、娘のお美代を売っても追っ付かないから、自分は寅旦那のところへ一生奉公する心算つもりで、黙って働いて居るんだそうだ。こいつは仏様のような男で、何んの苦勞もないように見えるが、腹の中ではうんと怨んでいることだろうよ」

「それから」

八五郎はなおも根掘りします。

「松蔵の伴の松太郎は十九か二十歳で家を飛出し、やくざな仲間に入っていたが近ごろは根岸で大工の真似をして、どうやら堅気で暮しているそうだ。そいつも手を廻して調べあげたが、その晩江の島詣りの約束で、子刻ここのつ（十二時）過ぎに根岸の棟梁とうりょうの家を出て寅刻みなつ（四時）過ぎには品川で多勢の仲間と落合い、何んにも知らずに江の島から鎌倉へ遊び廻っている。根岸から品川まで真つすぐに行っても四里以上あるから、二刻ふたときで辿りたどつくのは一杯一杯人間の足で目白台へ廻れる筈はない」

「――」

「松太郎の妹のお美代は、振袖新造ふりそでしんぞで籠の鳥さ」

「それから」

「雑司が谷の荒物屋の利八という親爺がある。寅旦那にひどい眼に逢わされたとかで、何時かはきつと殺してやると触れ廻してい

るが、その晩は疝氣せんきを起して早寝をしたから、口惜しいが下手人は俺じゃないと大威張りだ」

「へッ」

「まだ寅五郎を殺しそうなのはうんとあるが、まず一番手近なところはそんなものだ」

「そのうちで一番臭いのは？」

「松蔵かも知れないよ。田地を取られた上、娘を売って、倅は家出したんだから、——尤も、松蔵はその晩、練馬の弟のところへ法事に招ばれて泊るつもりで出かけたが、気分が悪くなって途中から帰ったそうだ」

「時刻は？」

「出かけたのは薄暗くなってから、尤も——法事に行くなら、齋飯さいはんは向うで出るんだろう——と寅五郎に当てこすられて、空き腹を抱えて出かけたせいかな、途中で気分が悪くなって、半里ばかり行って引返したというから、半刻も家をあけなかった筈だ」

「なるほどね」

ガラッ八は高慢らしく腕を組みました。が、何んにも見当が付いたわけではありません。

三

「親分、とうとう捕えましたよ」

鬼子母神きしもじん手前の現場に着くと、源吉の子分の磯吉が飛出しました。

「何を捕まえたんだ」

「下手人ですよ。——親分に言い付けられた通り、そつと弟の金次郎の野郎を見張っていると、案の定あの晩盗んだ金を持出そうとするじゃありませんか。否応なしに縛ってしまいました。ともかく親分が帰るまで、そつとして考えさせてあります。今ごろは請合白状したいような心持になって居るでしょうよ」

磯吉は心得顔に入口のすぐ側にある、長四畳を指さしました。

「そいつは良い塩梅だ。金はどこに隠してあったんだ」

源吉はガラッ八などを伴れて来たただけ無駄をしたような心持ちでしよう、振り返って気まずい顔を見合せます。

「物置の炭俵の中ですよ」

「どうして、あの晩盗み出した金と判ったんだ」

「一昨日の夕方炭屋から持って来た炭俵の中に隠してあったんだから文句はありません。——その炭俵を音羽の長屋の者にやるとか何んとか言って、自分で持出したは宜いが、中に千両箱を一つ隠してあるんだから、腰が切れませんや」

磯吉の鼻は少しばかり蠢きます。

「成程そいつは面白い凶だったな。——ところで刃物はどうしたか訊かないのか」

「一応訊いて見ましたが、白ばつくれて言やしません。二つ三つ引っ叩いたら、背後の苗代の中とか何んとか言うに決ってますよ」
「よしよし」

源吉はそれを聴き捨てて長四畳に入って行きました。

「あ、親分、私じゃない。——兄を殺したのは私じゃありません。助けて、助けて下さい。お願い」

柱に縛られた金次郎は、源吉の顔を見るとわめき立てるのです。

四十そこそこの陰惨いんさんな忍従に叩き上げられたような蒼黒い男です。

「金は盗んだが、兄哥あにきは殺さなかった——とでも言うんだらう。そんな言い訳は通用しねえ。さア刃物を何処へ隠した。そいつを聴こうじゃないか、え？」

源吉は物馴れた調子で畳みかけながら、縛られた金次郎の前にしゃが踞みました。

「刃物なんか、何んにも知りません。——私は金を盗みました。でも、こいつは私の金だったんです。死んだ主人と兄弟の仲と言つても、もとを洗えば他人同士の私が、二十年近くもただで働かされたんです。いずれ給料を勘定して、一度に払ってやるからと、兄は口癖くちくせのように言っていました。その兄が死んだ今となって、この世帯はどこへ行くか解りませんが、私が言い立てたところで、二十年の間の給料を誰も払ってくれる筈はありません」

「それでツイ殺す気になつたんだらう」

「飛んでもない。私はそんな人間じゃありません。昨日の朝兄が殺されていると知ったとき、皆んな大騒ぎをしている隙すきを狙つて、千両箱を一つ持出したのは、いかにも私が悪うございました。それは改めて返します」

「今さらそんな事をしたって追っ付くか、馬鹿野郎」

源吉はヌケヌケとした金次郎の弁解に腹を据すえ兼ねたものか、いきなり叱り飛ばしました。

「あッ、親分さん、私じゃありません。私はあの晩子このつ刻まで兄といっしょに居ましたが、それからそつと脱出ぬけだして、夜が明けてから帰って来ました。出たのも帰ったのも、お豊がよく知っています」

す」

「どこへ行って泊って来たんだ」

「表通りのお七のところ——」

「そいつは後で調べる。——尤も、お七のところにしけ込んだにしても、夜中にそつと抜け出して来る術はあるだろう」

「そんな事が出来るものですか」

際限もなく言い募る二人。我慢がなり兼ねて、八五郎はそつと源吉の袖を引きました。

「三つ股の、——こいつは少し変じゃないかね。殺して盗った金なら、炭俵なんか隠さずに、その晩のうちに始末をする筈だ。

——お七とか言う女の方を調べて見ちゃどうだろう」

「八兄哥、——俺は下手人は矢張りこの野郎だと思うよ。まあ、せつかくそう言うなら、もう少しあっちこっち当って見ようか」

源吉は少し不機嫌な様子で、ようやく長四畳から出ました。

四

目白長者、寅五郎の屋敷は豪勢でした。細川越中守屋敷の少し先、雑司が谷鬼子母神にいたる一廓に百姓風ながら高々と生垣を囲らし、藁屋根の庇を反らした構え、これに玄関を取付け、長押を打ったら、そのまま大名のお下屋敷と言っても恥しくないでしょう。

部屋部屋の青畳の清々しさ、家具調度の見事さ、こんな場末に、これほどの生活のあったのが、八五郎の眼にも不思議に映ります。寅五郎の女房のお富は、四十をよほど越したらしい年配にも恥

じず、夫が死んだ二日目に、紅白粉までつけて、ニヤリニヤリと岡っ引を迎えると言った肌合の女——吝けちで無慈悲で、強欲ごうよくだった寅五郎と、生れ変つて来ても気性の合いそうもない柄です。

「私はお豊といっしょに寝やすみますから、何んにも知りませんよ。梯子はしごはたった一つ、あの通り奉公人達の枕元を通らなきや、何処へも行けません。ホ」

危うく笑い出しそうにして、掌てのひらをちよいと返して、唇の蓋をすめるのです。

奉公人というのは、出来るだけ給料の安そうな小僧が二人、小女が二人。これはどう疑つて見ても事件に関係がありません。

主人の姪めいのお豊というのは、十八の娘盛り。気の毒なことに、身に着いた赤いものは、可愛らしい唇だけと言う有様で、朝から晩までこき使われるらしく、見る影もない痛々しい姿ですが、不思議な美しさが、その底から輝いて、ジツと見ていると、涙なみだを誘さそわれるようないじらしい娘でした。

「お前は主人を怨んでいるだろうな」
八五郎は親分の平次の調子でズバリとやって見ました。

「——」
黙つてその八五郎を見上げた眼には、見る見る涙あふが溢れます。
「給料を貰ったことがあるのかい」
娘は黙つて頭を振りました。

「主人をうんと怨んでいるのは誰と誰だ」

「——」
娘はそれにも答えません。

「止すが宜い、八兄哥。その娘の口を開かせるよりは、田圃の地

蔵様を口説く方が楽だぜ。俺はもうさんざん手古摺ったんだ」

無用の努力と思ったか、源吉は八五郎を促して家の外廻りをグルリと一巡しました。

「ここは？」

物の気はいを感じて、八五郎は納屋を覗きました。

「作男の松蔵がいるよ。その男はいちばん寅五郎を怨んでいる筈だが、——下手人にしちや少し正直すぎるよ。仏松蔵と言や、この辺で知らない者のない老爺だ」

「仏松蔵か」

八五郎はそれを口の中で繰り返して、物置の世帯を覗きました。そんな綽名がどうかすると、飛んだ喰わせ者の偽装になって居ることを、いろいろの機会で教わっているのです。

「——」

中はほんとうに形ばかりの世帯で、土間に筵を敷き、木の根っこを二つ並べ、火のない七輪は鉢巻をし、水のない瓶は、三分の一ほどから上は欠け落ちてゐる有様でした。

筵の上につまんで置いたような寒々とした老爺は、二人の姿を見ると、臆病らしくお辞儀をしました。老けては見えますが、それは貧苦と労働のせいで、本当はせいぜい五十四五でしょう。肘の抜けた野良着、ポロポロの股引、膝っ小僧がハミ出して、虫喰い月代が胡麻塩髭とともに浅ましく伸びております。

「爺さん、びくびくする事はない。正直に話してくれ」

八五郎はその側へ寄って、木の根っこの一つに腰をおろしました。

作男松蔵の話は、正直過ぎて嘘のようでした。一つは八五郎の明けっ放しな質問に引出されたのと、もう一つは、土地の者源吉が、いろいろの事情を知り抜いていて、松蔵に隠し立てを許さなかつたせいもあるでしょう。

「お前が寅旦那から金を借りて、田地を取上げられたというのは本当か」

八五郎の問いはこんな事から始まりました。

「へエ——、取上げられたと申しましょか。——お金は五年前に、三十両ほど拝借しました。重なる不仕合せと、伴の松太郎が手弄みを覚えて、不義理の借金を拵えたためでございます」

「それを払えなかつたんだね」

「利に利が積ってその翌る年には五十両になり、三年目には百両になっていました。これはたまらないと思って願ひに出ますと、田地を皆んなよこせという話でございます。——田地はほんの少しばかりですが、何代も前の先祖から伝わったもので、私の親も、その親も、その親の親も、丹精して肥やして来た土でございます。

——私が眼をつぶると、田の畦あぜ一本一本、畑の土くれの一つ一つもはつきり浮かんで来ます。——私は毎年春先になって、物の芽が育つ頃になると、朝から晩まで畑に出ては、両手で黒い土を掴つかんで、揉みほぐしたり、叩いたり、撫でたり、嗅いだり、時々は嘗なめても見ております。私一家の汗を何百年のあいだ吸い込んだ土を、どうして人様にやられるものでしょう。どうしてもいけないと仰しやるのを無理にお願いして一年延して貰いましたが、そ

れでどうなるものでもございませぬ。十七になったばかりの娘のお美代が、土と別れる私の嘆きを見兼ねて吉原に身を沈めました。が、女衞ぜげんの悪いのに引つ掛つて、手取りたった二十八両、その時はもう元金が百三十両で、一年の利子にもならない始末でございまして」

松蔵は膝にもろて双手を置いたまま、ポロポロと涙をこぼすのです。日光と土とに荒らされた、渋紙色しぶがみの頬を伝わって、その涙は胸から膝小僧まで落ちるのです。

「それから何うした」

八五郎も妙につまされて、鼻の中が塩っ辛くなりました。

「去年の秋になって、とうとう、私の田地を皆んな差上げて、借金を棒引にして頂きました。土地はせいぜい百両そこそこのものだから、家も屋敷も何もかも附けても、ひどい損だと寅旦那は仰しゃいます」

「その不足分のせいでお前が一生奉公にここへ入つたという話だが——」

源吉は口を入れます。

「いえ、それどころじゃございませぬ。私は親から譲ゆずられた土地に離れ兼ねて、私の方から進んで作男に入つたのでございませぬ。給料も何んにも頂けません、こうして食べさせて下されば、私は子供の時から馴染んで来た土地でどうやらこうやら働き続けていられます。——さいしょ旦那様は私のお願いをお嫌がりになりましたが、近頃では却かえって喜んでる様子でございました。私は一生この厄介になって、少しばかりの不自由さえ我慢すれば、蚯蚓みみずのように自分の田地を掘って居られると思いましたが、旦那

様が亡くなつては、それも怪しくなりました。よくよく運のないことでございます」

松蔵はそのまま大地にのめり込みそうに、肩を落して涙はなをすすめるのです。

「そんなに気を落したものでじゃあるまいよ。土は日本国中どここの土も同じことじゃないか」

八五郎はツイお座なりを言いました。

「――」

黙つて頭を振る松蔵。

「ところで、伴の松太郎はどうして居るんだ」

ガラツ八は照れ隠しらしく訊きました。

「根岸で叩き大工の真似事をしてるといふ噂でございます」

「此処へ来ることがあるのか」

「もう一年も顔を見せません。娘のお美代が売られて行く時だつて人伝てに教えてやったのに、逢いにも来ない奴でございます」

松蔵の顔には、頑かたく々な親らしい怒りが燃えました。

「そいつは薄情だな」

「そればかりじゃございません。こんなみじめな目に逢うのも、もとはあの野郎がやくざ仲間に入つて手てなくさ弄みなどをしたから起つたことなのに、一言の詫わびでも言うことか、近頃は身まで売つた妹のところへ、ノメノメと無心に行くそうでございます。逢つたら叩きのめして、思い知らせてやろうと思ひますが――」

松蔵の怒りは際限もなく発展しますが、それが少しばかり滑稽こっけいに、そして物哀れにさえ見えるのでした。

八五郎はそのまま神田へ帰って来ました。下手人を挙げる心算つもりのが、源吉の手柄の引立役になって指をくわえて引下がったわけです。

「どうした八、元気がないじゃないか」

平次は軽い調子でした。

「何うにも手の付けようがありませんよ。下手人は金次郎でなきや松蔵だが、あつしの勘じゃ、どうも二人とも下手人らしくねエ」

「勘や見当で下手人をきめられてたまるものか。——それより、主人の寅五郎が殺される前に、牝犬めすが一匹死んだ筈だ。それはどうしたんだ」

平次はさすがに急所を衝つきます。

「殺されたのか死んだのかわかりませんが、二日前の朝、手飼いの牝犬が、お勝手口でコロリと死んでいたそうですよ。——前の晩まで、恐ろしく元気だったのが——」

「前の晩まで元気な犬が、卒中や驚風きょうふうでコロリと死ぬものか。そいつはマチンを食わされたに決まっているようなものだ。前の日変な奴が来なかったか、聴きかなかったのか」

「いいえ」

「まあ宜いやな。犬を二日前に殺す奴は、余っ程知恵が廻る筈だ。お前をやったのが間違まちがいさ」

「親分」

「急に果たし眼めになったって追っ付かないよ。下手人は外から

入ったに決つては居るんだ。もう一度引返して、寅五郎をうんと
怨んでいるという音羽おとわの荒物屋利八のその晩の様子と、それから、
犬の死んだ前の日、変な野郎が来なかつたか、それを訊いて来る
んだ。宜いか」

「へエ——」

「それから、少し足場は悪いが、帰りに吉原へ廻つて、お美代に
も逢つて来るが宜い。こいつは悪くない役目だぜ。兄の松太郎の
身持と、親父の松蔵の言ったことに、掛引や嘘がないかどうか、
それだけ訊けばたくさんだ」

「へエ——」

ガラッ八は無精らしく出て行きました。それから小半刻も経つ
と、平次は何を思い付いたか、下っ引の竹を呼んで品川に走らせ、
自分は仕度もそこそこに、根岸に向つたのです。

大工の松太郎の巢はすぐ判りました。まだ棟梁とうりょうの初三郎の家に
ゴロゴロしている身分で、そこで訊くと、

「三日前に江の島から鎌倉へかけて、五六人の仲間といっしょに
遊びに出かけ、今晚か、遅くも明日あたりは帰るだろうと言う話
ですが、松さんと来た日にゃ、手の付けようがありませんよ。酒
と勝負事が好きで、人間は器用なんだが、仕事に一向身が入りま
せん。あれじゃ何年経つたつて、一本の職人になれっこはありま
せんよ」

初三郎の女房は、待つてましたと言わぬばかりにまくし立てま
す。

「そいつは始末が悪かろう。ところで、二日前の晩に、ここを発つ
た時刻じこくを聴きたいんだが」

平次はさり気なく訊ねます。

「宵から急ぎの仕事を片付けて、発ったのは子刻ここのつ（十二時）大分過ぎでしたよ。どうかしたら子刻半（一時）近かったかも知れません」

「一人かえ」

「え、仲間の若い人たちは、前の晩から品川へ行つて、土蔵相模どぞうさがみで遊んでいたそうで——」

「仕度は？」

「大した仕度はなかったようです。尤ももつと、路用がないからと言って、うちの人から三両ばかり借りて行きました」

「有難う、そんな事でよからう」

それ以上は平次にも引出しようはありません。

物足りない心持で神田へ帰つて来ると、品川へやった下っ引の竹も、目白へ行った八五郎も帰つて来ておりました。

竹の報告は予期した通り、

「松太郎は寅刻ななつ（四時）過ぎには品川で土蔵相模の仲間と一緒になっていますよ」

夜の短い時分で、寅刻過ぎななつというのと、すっかり明るくなっている筈、根岸から子刻過ぎここのつに出ると五里近い道たどを辿り着くのが精一杯でしょう。

「八の方はどうだ」

平次は八五郎のモジモジした顔へ振り向きしました。

「牝犬めすいぬの死んだ前めの日、変な奴がウロウロして居たそうですよ。小僧や小女が追っ払つても、頬冠ほおかぶりも取らずに何にかブツブツ言つて居たが、主人の顔を見ると、さすがに驚いて逃げ出したそ

うで」

「それから、もう一つ——」

「音羽の荒物屋の利八は疝氣せんきが起きて早寝をしたのは本当で、音羽の本道が言うんだから嘘じゃないでしょう。——あの晩の容体じゃ、便所へ行くのも難儀だったに違ええねえって」

「そんな事で宜かろう」

平次は腕うでを拱こまぬきました。

「下手人の見当は付いたんですか、親分」

「いや、少しも解らねえよ」

「やはり下手人は金次郎ですかねえ」

「大間違いだ。下手人は翌る日千両箱を持ち出すような、そんな間抜けじゃない」

「松蔵は？」

「今のところ、松蔵が一番怪しいよ。それほどまでに大事に思う土地を奪られた上、たった一人の娘を吉原へ売った——そいつは皆んな寅五郎のせいだからな」

「恐しく正直そうな老爺ですよ、親分」

「そいつが当てにならないのさ。今までもこの上もなく正直そんな悪者をずいぶん手がけている筈だ」

「そう言えばそんなものですが」

「ともかく、本人に逢って見ようか。猫っ冠りか、腹の底からの正直者か、大概たいがい一と眼で判るだろう」

平次はガラッ八と一緒に、とうとう目白めしろ長者の家へ出かけて見る気になったのです。

「そう来なくちゃ面白くない」



©2017 萩 柚月

その後ろからいそいそとついて行くガラッ八。

七

「あ」

平次は鶴亀つるかめの松の前に、棒のように突っ立ちました。

「親分、どうしたんです」

八五郎の方が驚いたのも無理はありません。

「八、あれを見たか」

「何んですえ、親分。細川様の御門と鶴亀の松、——外に何んにもないじゃありませんか」

「いや、ある筈だ」

「御門の前に駕籠が一挺」

「それから」

「飛脚ひきやくが飛出しましたね、お下屋敷から。九州熊本の御領地へ、急ぎの手紙でも持って行くんでしようよ」

「そこだよ、八」

「へエ——」

八五郎はキョトンとしました。親分の平次の調子が、あんまり不断と違っていたのです。

「夜でも昼でも、俺達は江戸の町の中を、滅多に駈けちゃ歩けないな」

「夕立に逢った時は別ですがね」

「その通りだ。夕立にでも逢わなきゃ、江戸の町を駈けて歩くと、誰でも変だと思う。まして真夜中だ」

「へエ——」

「ところが、江戸の町の真ん中を、存分に駈け出しても、一向人の驚かない稼業かぎようがある」

「へエ——」

「駕籠屋と飛脚だよ、八」

「？」

「四つ手なら飛ぶ方が当り前だが、町駕籠だって、急ぎの用事の時はずいぶん飛ばせる。まして飛脚はノソノソ歩いた日にゃ、恰好がつかない」

「？」

「寅五郎殺しの下手人は、——俺にようやく判ったような気がするよ。——俺はここから引返す。お前は真っすぐに目白へ行つて、松蔵たを縛り度くたてウジウジしている三つ股の源吉兄哥に——勝手

にするようにと言ってくれ」

平次の言葉は、あまりにも予想外です。

「下手人は、あの仏松蔵ですか」

「そうかも知れない、でないかも知れない。が、とにかく、松蔵を縛ると、下手人は苦もなく判るよ、それが反って松蔵を助ける手段になるかも知れない」

「へエ——」

平次はそれっきり引返してしまいました。

親分の意見に、善悪ともに盲従するガラツ八は、目白屋敷に立ち向うと、おどろき騒ぐ人たちを尻目に、キリキリと作男の松蔵を縛り上げ、源吉の嫌味を聴き流して、番所へ投げ込んだことは言う迄ありません。

それからいろいろの手順を運んで、神田の平次のところへ帰ったのは夜の戌刻半頃。

思いきやそこには、松蔵の伴松太郎が、江の島から帰ったまま、旅の埃も払わずに、

「目白長者の寅五郎を殺したのは、この松太郎に相違ありません。親父の縄を解いてやって下さい。お願いでございます」

そうわめき立てながら、平次のところに飛込んだところでした。

「宜し宜し。お前が名乗って出るのを待って居たんだ」

「へエ——」

松太郎は気抜けがしたように、上框あがりかまちに崩折れました。

「お前はあの晩、根岸で辻駕籠を拾って目白台まで駈け付け、駕籠屋に小判一枚はずんだらう」

平次は掌てのひらを指します。

「どうしてそれを、親分」

「根岸の駕籠屋に聴いたのさ。それにお前は、棟梁とくりようのところまで三両借りて行ったじゃないか。それから、寅五郎を殺して刀を江戸川に投げ込み、細川様の飛脚ひきやくの振りをして、品川まで飛んだ筈だ。——その間がたった一刻半、恐ろしく早い足だな、松太郎」

「へエ——」

何も彼も言い当てられたらしく、松太郎は唯恐れ入ります。

「だが、お前にも恐しい当て違いがあった。——その晩親仁の松蔵ねりまが練馬へ行く筈だから、疑いは方に一つも親仁へ懸かる筈はないと思ひ込み、犬まで殺して仕事に取りかかったが、運悪く親仁の松蔵が腹痛を起して途中から帰って来たとは知らなかった」

「——」

松太郎は恐れ入ってしまいました。平次の明察には、一点の狂いもありません。

「金次郎か利八が縛られる分には、お前は知らん顔をしている心算つもりだったろう。太てえ奴だ」

「親分、あつしは其処までは考えません。あんなに土地を大事にして居た親仁と、身売りまでした妹の敵を打ち度たい心持で一ぱいだったんです。——でも、こんなあつしでも命は惜しいと思ひました。免のがれるだけは免れようと犬を殺したり、飛脚に化けたりしました。親仁が練馬へ行ったことと思ひ込んだのが間違もといの基もとです」

「悪いことは出来ないな、松太郎」

「だから名乗って出ました。どんなお仕置にでもして下さい。その代り親分、銭形の親分さんを見込んでお願い申します。寅五郎

に奪られた土地を親仁に返してやって下さい。親仁は地虫じむしのよう
なもので、土がなくちゃ生きて行けない人間です」

「ウム、そいつは何んどかしようよ」

平次は大きくうなずきました。

「それから、吉原に居る妹——」

「それもお前の父親の手許に返してやろう。心配するな」

「有難い。それであつしは、磔刑はりつけになつても怨うらみはない。親分、こ
の通り」

松太郎は土間に滑り落ちて、平次の前に両掌りょうてを合せるのでした。

「止してくれ。俺はまだ人に拜まれるほど劫ごうを経へちや居ねえ」

平次は眩まいしそうに手を振るだけです。

×

×

お白洲は思いのほか寛大で、松太郎は、三宅島に流され、目白
長者の寅五郎の屋敷は欠所けつしょになりました。その土地の大部分は、
無理に捲むしり取られた人たちに返され、松蔵は田地と家屋敷の外に、
親元身請けにするだけの金を返して貰ったのは、銭形平次が、与
力笹野新三郎を通しての運動のせいだったでしょう。

「驚いたね、親分。こんな政談は初めてだ」

ガラッ八がそういうのも無理のないことでした。

「俺も初めてさ。この上は松太郎が早く島から帰るように、笹野
の旦那やお奉行にお願いして見よう。お豊が一生懸命で待ってい
るようだから」

平次はそう言うのです。もとの安らかな生活に還かえった松蔵は、
娘の美代と、頼る者のないお豊を迎えて只管ひたすら伴ともの無事に帰る日を
待っているのです。自分の手に還かえった土を、揉みほぐしたり、

撫でたり、叩いたり、嘗^なめたり、愛撫の限りを尽しながら――。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十六年五月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第六卷 河出書房 昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行 錢形倶楽部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>